

出光美術館研究紀要第二十二号抜刷
二〇一七年一月三十一日発行

「着到和歌」について

——「文明十三年着到千首短冊」を中心に

別府節子

「着到和歌」について

——「文明十三年着到千首短冊」を中心に

別府節子

はじめに

一、着到和歌の研究史

二、「文明十三年着到千首」について

三、着到懐紙と着到短冊

おわりに

はじめに

中世和歌の詠作形式の一つである「着到和歌」は、中世文学の研究者以外には耳慣れない言葉であろう。和歌関係の辞典等には解説があり「註」、要約すると「複数の参加者がいる和歌の興行である」「出勤簿に名を記すようなやり方からくる名称で、指定の場所に設置された帳に、参上時に和歌を記す形式らしい」「九月九日等の節日から始める」「定められた題で毎日一首ずつ詠む」「百日間で百首の詠作が一般的」「室町時代以降盛んに行われた」といった属性が挙げられる。しかしこの解説だけでは、たとえば百日で百首、毎日一首ずつなら、それを参加者が交替

で詠むのか、あるいはもし参加者が十人なら、全員が百首ずつで、全容は千首の和歌になるのか、といった具体的な事柄はわからない。また「着到和歌」の実践面の詳細も不明である。このわかりづらさはおそらく、「着到和歌」が興行であり、記録には残るものの具体的なやり方の詳細は不明なこと、「着到和歌」の具体的な理解を進めるであろう遺品（懐紙、短冊）の伝存が必ずしも多くはないこと、そして「着到和歌」のテキストに関する研究と、懐紙や短冊等の現物資料を対象とした研究は、各々ある程度は行われているが、互いに作用することがないまま、その意味では本格的な研究には至っていないこと等が挙げられるであろう。稿者は昨年十一月十九日～十二月十八日まで、「時代を映す仮名のかたち」と題する展覧会を企画し、その室町時代の和歌の自筆資料の一つとして、本稿で、主に取り上げる京都国立博物館蔵「後土御門天皇他筆 着到和歌短冊」（以後、「京博蔵文明十三年着到千首短冊」と略、全二二三枚、各三〇・四×三・八センチ）「稿末図11118、口絵10」を借用、展示した。展示や図録解説においてはスペースが限られているため簡略な言及にとどめたが、本稿では「京博蔵文明十三年着到千首短冊」を中心に、「着到和歌」全般に関する考察をまとめておきたい。

一、着到和歌の研究史

「京博蔵文明十三年着到千首短冊」についての、主だった研究を概観しておく。前述のように「着到和歌」については、1 伝本等、主にテキストに関するものと、2 現物資料を対象にしたものがあると思われるので、またがる研究もあるが、一応分けて記す。

1 「着到和歌」の伝本、主にテキストに関するもの

* 井上宗雄氏が「中世における千首和歌の展開」〔註2〕において、「京博蔵文明十三年着到千首短冊」の全容である伝本を、「文明十三年九月内裏百日千首」として掲出。「文明千首」と略称されること、「親長卿記」の記述から、同年同月一日に始められた百日千首であること、十二月二十七日には、千首の和歌を評価する合点を付す点者に、飛鳥井榮雅が下命されたこと、後土御門天皇等十人の参加者名の掲出、着到形式のこと、この折の短冊八葉が「大日本史料」に「猪熊信男蔵二百十一枚の内」として掲出されること〔註3〕、題の出典が「中院亭千首題」であること、宮内庁書陵部蔵本、版本千首部類本等の伝本があること等、「文明十三年九月内裏百日千首」に関する書誌として必要な内容をほぼすべて挙げている。ただし後述するように、この論考の四年前に、既に京都国立博物館で展示とデータの開示のあった、「京博蔵文明十三年着到千首短冊」が、この「文明十三年九月内裏百日千首」の開催当時の原本の一部であり、「旧猪熊信男氏蔵短冊帖」〔註3 参照〕に影印の短冊のつれであるという指摘はない。また、同氏は千

首の分類として①個人による千首と②複数歌人の和歌を集めた千首を挙げ、当該千首を②に分類した。これは首肯されるが、「複数歌人に歌題を力量、身分他に応じて分かち与えて和歌を詠せしめ、(中略) 続歌形式でまとめたもの」の例とすることには、後述するように異論がある。

* 井上氏の研究を承けた、主に伝本を対象とする本格的な研究として、三村晃功氏による「内閣文庫蔵『文明十三年着到千首』——解題・本文初句索引」〔註4〕がある。三村氏は、当該千首が、前項の井上論考の分類②「複数歌人による千首」の嚆矢であるとし、便宜のため、題の出典である「中院亭千首題」をすべて提示した。また、内閣文庫本奥書に触れ、「飛鳥井大納言点二百七十二首」とあるが、内閣文庫本には点が八二首のみ、千首部類本には点が二五七首のみに認められ、双方とも奥書の二七二首に満たないことを指摘、双方の点のある和歌の対照表を作成する。さらに、両伝本の本文異同を検討し、対照表も付して、内閣文庫本の伝本としての位置を検討した。

2 現物資料を対象にしたもの

* 「着到和歌」の作品を展示、解説して具体的に示したものとしては、京都国立博物館特別展「かな」の展覧図録の解説が早い〔註5〕。当該図録には「後土御門天皇宸翰着到短冊」(本稿「京博蔵文明十三年着到千首短冊」と「着到懐紙(四日 山家鳥)」の遺品がそれぞれに提示された。「京博蔵文明十三年着到千首短冊」については、文明十三年に後土御門天皇が十人の侍臣を召して詠じた千首の着到和歌の折の短冊であること、伝存する短冊については、法量、短冊の各首毎に詠題と日

付、綴り跡の穴があること、天皇と参加者毎の違る短冊の枚数を提示する等、詳細なデータが提示された。

*その後、上記の「京博蔵文明十三年着到千首短冊」については、同館特別展示と図録にふたたび取り上げられ、この中で後土御門天皇宸筆の「立秋朝」が「後土御門天皇詠草」に見え、詞書の「文明十三年の千首」とは、「親長卿記」「お湯殿上日記」記載の、同年九月から百日間、後土御門天皇が近臣とともに十人で、毎日一人一首、計千首の和歌詠んだ着到和歌のことで、一二二枚の短冊はその折の一部であることが提示された。すなわち、本作品が文学史上の「文明十三年着到千首」であると特定された^{註9}。ただし、本作品の全容を伝本側から言及した、前掲井上、三村氏論考の成果との接触はないため、つれの短冊群の所在、題の出典等には触れられていない。

*京都国立博物館における「着到和歌」作品の展観や図録の解説等をきっかけとして、着到和歌についての文献、興行原本、写本等を詳細に調査し、本格的な研究としてまとめたのは、辰田芳雄氏による一連の論考であろう^{註7}。辰田氏論考においては、現物資料と文献の双方の検討から、「着到和歌」の実践に関する踏み込んだ言及がされている^{註8}。ただし、本稿の「京博蔵文明十三年着到千首短冊」に関する言及には誤解がある（後述）。

*辰田氏の研究を承けて、石澤一志氏は「文明十二年九月着到和歌をめぐって」という口頭発表を行っている。石澤氏の発表は、その主たる目的が着到和歌の懐紙や短冊に記された女房の筆跡から、無署名の女房短冊の筆者を比較同定することであり、着到和歌懐紙に関する部分が多くを占める。が、着到和歌短冊の現物資料で、女房詠のある「旧

猪熊信男氏蔵短冊帖」（註3参照）とともに、館蔵データベースからとして京都国立博物館蔵「後土御門天皇宸翰着到短冊」（本稿の「京博蔵文明十三年着到短冊」）も取り上げられた^{註10}。

二、「文明十三年着到千首」について

第一節ではこれまでの研究を概観したが、ここで、「文明十三年着到千首短冊」^{註11}について、従来指摘されていることを、テキストと現物資料の両面でもう一度まとめておく。

○「文明十三年着到千首」については既に指摘のある通り、「親長卿記」「御湯殿上日記」に記事が所載され、「後土御門天皇集」には百首が所収される。

○「文明十三年着到千首」は「文明千首」とも略称され、全容を把握できる写本伝本が内閣文庫、宮内庁書陵部などにあり、版本部類本もある。この内、内閣文庫本は公文書館のデジタルアーカイブで全容を見ることが可能であり、翻刻と初句索引が、前述三村論考にある。

○「京博蔵文明十三年着到千首短冊」と「旧猪熊信男氏蔵短冊帖」に影印の短冊は、ともにこの「文明十三年着到千首」（「文明千首」）の興行当時の原本であること。「旧猪熊信男氏蔵短冊帖」は、「猪熊信男氏所蔵文書」二として、東京大学史料編纂所図書室の開架で閲覧が可能である。

○千首を着到形式で詠んだ催しで、文明十三年九月一日が起日で、十二月十二日が満日であること。

○百日間で千首詠を十人で詠む。参加者は「親長卿記」から、後土御

門天皇、大炊御門信量、旧院上臈(三条冬子)、中院通秀、海住山高清、甘露寺親長、三条西実隆、四辻季経、姉小路基綱、冷泉為広(おおよそ身分による順)であったこと。

○題の出典は「中院亭千首題」である(千首題のすべてが、三村論考に提示)。○「文明十三年着到千首」奥書によれば、興行後、十二月二十七日に、後土御門天皇から飛鳥井榮雅に合点の沙汰が下命(親長卿記)、実際に「文明十三年着到千首」の伝本には合点のある歌が認められるが、その歌数と奥書にある合点歌数とは合わないこと。

さて、ここからは、従来言われていない「文明十三年着到千首短冊」や着到和歌全般についての考察を、列挙の形で述べる。

1 「京博蔵文明十三年着到千首短冊」について、一一八枚の内、「立秋朝」等に振られた最も早い日付である「二日」は、その前に「春二百首」と「夏百首」の三百首題があり、十人で詠むので三十日かかることになり、九月一日が起日とすると、九月は小の月なので「夏百首」の最後の十題が十月一日に詠まれる。したがって、「秋二百首」の先頭である「立秋朝」等に振られた二日は十月二日となる。一方、「旧猪熊信男氏蔵短冊帖」に影印の短冊数であるが、諸研究が「大日本史料」の記事を引いて二一枚とする。しかし、実際に「猪熊信男氏蔵文書」二所収の「旧猪熊信男氏蔵短冊帖」に影印された短冊を数えると二三〇枚である。影印の短冊を検分したところ、大きさが異なる、「中院千首題」ではない、十名以外の作者である、といった白短冊はなく、二三〇枚のすべてがこの折のつれと認めてよいと思われる。あるいは、「大日本史料」記載時に二一枚だ

ったのが、それ以降猪熊氏が所蔵数を増やした可能性もあるが、当該短冊は二三〇枚である。

よって、「文明十三年着到千首」の興行当時の原本の短冊は「京博蔵文明十三年着到千首短冊」が一二二枚、「旧猪熊信男氏蔵短冊帖」が二三〇枚で、計三三二枚となる。ところで、「旧猪熊信男氏蔵短冊帖」にも「京博蔵文明十三年着到千首短冊」にも、参加者である三条西実隆の短冊が一枚もない。また旧院上臈の短冊も、前者には数枚あるが後者には一枚もない。おそらく、どちらの短冊も、好事家の人気から、単品として、また短冊手鑑等に需要があり、早い時期にまとまりから散佚したものと思われる。

2 内閣文庫本「文明十三年着到千首短冊」(「文明千首」)を詳細に検討すると、題の出典である「中院亭千首題」と異なるところがある。ここでは題自体の一字抜けやほぼ同意の異同等は置いて「註12」、題の順不同の理由を考える。たとえば、「中院亭千首題」で「池柳」「川柳」「岸柳」「門柳」の順が内閣文庫本では「池柳」「門柳」「岸柳」「川柳」となっている。これは詠まれた短冊を重ねる折、前述の詠者の順を第一に考えたためであろう。「池柳」を後土御門天皇が詠み、「川柳」を信量が詠むべきところ、信量は四番目の「門柳」を詠んでしまった(猪熊信男旧蔵短冊帖)に残る短冊で確かめられる。そこで、本来は四番目の詠者である通秀に二番目の「川柳」を詠ませた。その後、題の順よりも、詠者の順を尊重して重ねたために、千首題の順に不同が生じた。また、九月十五く十六日の「花」関連の題の部分にも異同がある。本来は「花下(本)」「花根」「花挿頭(挿頭花)」「花手向」「花麻」「花袂」「花衣」「花鏡」「花錦」「花色」が千首題の順

で、「花色」は十番詠者の為が詠むはずであった。が、おそらくは欠席のために、為広詠「花色」題の短冊はない。代わりに後土御門天皇が翌日の十六日分として「花色」を詠む。そうすると、十五日分が一首足りなくなる。十六日は本来は「花便」「花主」「花面影」「花句」「花形見」「惜花」「落花」「三月三日」「桃花」を順に詠むべきところ、十五日に「花色」を詠まなかった為広に「花句」と「桃花」の二首を詠ませて、「花句」を十五日に回したのである。このため、正規の千首題なら「花錦」「花色」「花便」「花主」「花面影」「花句」とくるところ、内閣文庫本では、「花錦」「花句」「花色」「花便」「花主」「花面影」という順不同が生じたと考えられる。そしてこれは、『親長卿記』に「毎日可詠進、於一兩日之無沙汰者可有御免、可詠入云々」(毎日の詠進が義務だが、一、二日の欠席は許容されるので、詠入れるべし)とある言及が、現実にはどのように対処されたかを、物語る箇所と思われる。

3 『文明十三年着到千首』を見ると、起日の九月一日は、後土御門天皇が「中院亭千首題」の最初の題である「立春朝」を詠み、以降、前述の参加者が「中院亭千首題」を順番に詠んでゆく。二日にもこの順番は守られており、千首が果てるまで、詠者の順は初めの順(おおよそ身分による順)であることがわかる。この詠歌の順は、十人すべての短冊は揃ってはいないが、原本である「猪熊信男旧蔵短冊帖」や「京博蔵文明十三年着到短冊」においてもおおよそ確認することができる。

さて、前述の井上氏論考では、『文明十三年着到千首』を「複数歌人に歌題を力量、身分他に応じて分かち与えて和歌を詠せしめ、(中

略) 続歌形式でまとめたもの」の例として挙げている。稿者も詳細を検分する前は、この千首は続歌形式で詠まれたと考えていた。確かに本千首は千首題を十人で分けてはいる。しかし、千首題を籤等で引いて分けて詠み、詠歌後に元の題のユニットに戻すため、詠者の順がランダムになり、詠歌数も人によって異なる続歌形式にはなっていない。千首題をおおよそ身分順の十人で、組題の頭から順番に詠んでいるだけであって、各人の詠歌数は等分の百首ずつである。これは続歌形式とはいえないのではないか。

4 「京博蔵文明十三年着到千首短冊」一二三枚と「旧猪熊信男氏蔵短冊帖」に影印の二三〇枚、計三五二枚の短冊は、部分的であるとはいえず、『文明十三年着到千首』の興行原本であるため、貴重な本文を有している。前掲三村論考所載の、内閣文庫本と千首部類本における本文異同の対照表に挙がる和歌の中で、短冊が伝存する例は六例ある(歌題「見花」「款冬露」「袖露」「庭萩」「嶺初雁」「杜紅葉」。このうち、「見花」「款冬露」「杜紅葉」は、千首部類本の本文とは短冊本文は合っている。しかし、「袖露」「庭萩」「嶺初雁」においては、両本とも短冊本文とはかなり異なる本文を伝えている(稿末の翻刻に付記)。また、今回仔細に検討する時間はなかったが、両伝本間に異同はなくとも、短冊本文とは異なる本文もあると思われる。

一方、後土御門天皇から十二月二十七日に、千首に合点をするように飛鳥井榮雅に下命された時には、「此三卷千首、可被進点之由、」(『親長卿記』)とあるので、既に千首は全三卷仕立ての証本に書写されており(親長が書写したか)、合点はこの証本に付されたことになる。短冊の遺品の中には、和歌や題に合点が記されているものを見かけ

るが、貴重な本文を持つこの千首短冊原本は、満日の十二月十二日に、「お湯殿上日記」に「御短冊ども重なりて」とあるように、現存の短冊に見える綴じ跡の穴で、千首短冊は幾つかに分けられ綴じられたが、そのものはその後、証本としては用いられなかったことになる。

三、着到懷紙と着到短冊

和歌の詠作形式は、様々な局面から分類されるが、その一つとして懷紙、短冊といった歌会で用いる料紙による分類が考え得る。一般的に懷紙による歌会では、参加者全員が、事前に与えられた、同じ題(兼題、通題)で、懷紙に作法通りの端作(季日や歌会のタイトル、詠者の官位と署名等で構成)を書いた後に、一首く五首の和歌や定数歌をしたためる。一方短冊は、数十首以上の定数歌の組題を、参加者がその場(当座)で籤等で引き分けて、簡略な書式で記す統歌形式の歌会に用いられる。「着到和歌」も詠作形式ではあるが、こちらはいわば、集まり方と記し方に特徴のある形式なので、「着到」による懷紙的な歌会と、「着到」による短冊的な歌会が成立する、と当初は考えられたのではないか。「着到懷紙」は、同題の和歌が参加者の数だけ一日分として、巻物や双紙の一面に並ぶ「圖こ」。一方、「着到短冊」は、異なる題の和歌が参加者の数だけ、一日分の短冊として残る「圖こ」。「着到懷紙」は、各自個別に書いていた和歌懷紙が、日付と通題の下に一枚に集約された形となり、それに従い煩雑なタイトルや位署等の端作もなくなって、和歌本文も短冊のような二行書きと署名のみになっている。通題、兼題の性格を残しながら、コンパクト化、簡略化が紙の上で実現されている。これに対して、「着到短冊」はどうか。「文明十三年着到千首短冊」を見た限りでは、短冊の属性の何かがより簡便になっていることはない。むしろ、前述のように、組題の頭から終わりまでずっと、身分による詠歌順が保たれていて、一般的な短冊の歌会——複数の参加者が、複数の題を能力等によって、当座で分けて詠むため、題を元のユニットに戻すと、詠歌順や詠歌数がランダムになる統歌形式——の持つ自由さがない。「着到懷紙」は、辰田、羽田、石澤各氏の註に挙げた論考に紹介される通り、その伝本も興行原本である懷紙の断簡も、後土御門朝以降、かなりの数が確認される。しかし、「文明十三年着到千首短冊」は、三村氏論考の通り、「着到短冊」の嚆矢と考えられるのだが、「着到懷紙」のように、その後にも続く「着到短冊」の伝本や現物資料は確認されないように思われる。このようには考えられないか。懷紙の歌会に対して、短冊による統歌歌会とは、その発生時から持っている当座性(ある一時にその場で分けて詠む)故に自由であった。しかし、「着到和歌」の数日にわたる興行。という制約の中では、短冊統歌の当座性は活かしづらく、ともかくも料紙としては短冊を用いて、千首を試行してみたものの、簡便性は見出されなかった。したがってそれ以降、数の多い定数歌の短冊は、従来通り「短冊統歌」の形式で続行されたのではないか(註13)。

「京博蔵文明十三年着到短冊」については、前述のように幾つかの研究において言及されているが、「着到懷紙」と何らかの形で混同された誤解がある。辰田氏は、この「京博蔵文明十三年着到千首短冊」を、卷子か双紙に清書される「着到和歌懷紙」の前段階として、参加者個人が用いた草稿と考えている。しかし、本作品は千首題がすべて異なる「着

到千首短冊」であり、百題を十人が同題で百首ずつ詠んで千首とした着到和歌懐紙の草稿ではない。

ただし、辰田氏の「着到和歌懐紙は、清書される前段階の草稿として、短冊に書かれて持参されたかもしれない」とする指摘も見逃せない。その可能性のある短冊の遺品が「京博蔵文明十三年着到千首短冊」の一二枚以外の白短冊として遺っているので、報告しておく。冷泉為広による白短冊「図4-1」で、法量は「京博蔵文明十三年着到千首短冊」とほぼ同じ。題が記されず「末とをくくみてもしるし神かせや／みもすそ河のふかきめくみは 為広」という和歌が記される。この和歌は、羽田石澤両氏によって、断簡が計九紙報告されている「文明十二年九月一日起日着到和歌」の懐紙断簡の内、羽田氏が「神祇」（個人蔵）として紹介、石澤氏が「神祇」（弘文社待買古書目）四〇、個人蔵）として図版を掲載する断簡「前掲図2参照」の、十四首目「くみてしる句もきよし神風や／みもすそ河のたえぬなかれは 為広」とともに「神祇」を詠じているせいもあるが、似ていると思われる。さらにこの短冊には裏書きが透けて見え、すべては読めないが、反転した画像の上部には「文明十二年」と見え「図4-2」、上記「着到和歌懐紙」と同じ年が記されている。もちろん、この一例だけでは、着到和歌懐紙の草稿に短冊が用いられたことの決め手とするには十分ではなく、可能性として挙げたまでである。というのも、白短冊の遺品の中には、本短冊のような題の記されていない短冊を見かけることがままある。あるいはそれらの中に、「着到和歌懐紙」の草稿がある可能性があると考えられるため、本例を提示しておく。

おわりに

本稿では、まだまだわからないことの多い「着到和歌」の、その中でも現在のところ、遺品が一つしか知られない「着到短冊」である「文明十三年着到千首」について、研究史をまとめ、稿者にわかる範囲での誤解の訂正と、「着到短冊」が他に類例がないことの理由の推測等を行った。また、「着到懐紙」とその草稿としての「白短冊」についても、その可能性を提示した。「文明十三年着到千首」は、既に内閣文庫本等でテキストの全容が確認できるが、前述のように、「京博蔵文明十三年着到千首短冊」は、興行原本としての本文が貴重なため「註14」、稿末に翻刻し、展覧会借用の調査時に撮った一二枚の画像を添付した。

註1—たとえば「和歌文学大辞典」によれば、「着到は著到とも。和歌詠作形式指定の場所に向き、定められた題に応じて、歌を毎日一首ずつ詠むもの。複数名の参加者を定めて、開始は正月一日、九月九日などの節日に設定し、一〇〇日間で一〇〇首を詠作するのが一般的で、最終日に宴が行われる場合もあった。「着到」は参加者が名を記す出勤簿のこと（小右記・弁内侍日記）。これを和歌に応用して、和歌を概に記入する形式で行うようになったと見られる。「明月記」建仁元（一一〇一年）八月五日に「着到」の語が見えるが、その内実は不明。「拾藻抄」に御子左為藤が「日次の歌をはじめて人々にも勤めて、着到を作りて書き付け侍りし」とあるのが早期の例。室町以降、和歌稽古・参加者の結束強化・祈念等の目的により、公武で類繁に行われた」とある。

註2—「和歌の伝統と享受」（和歌文学論集）10所収 風間書房 一九九六年、「中世歌壇と歌人伝の研究」笠間書院 二〇〇七年に加筆再録。

註3—「大日本史料」には、確かに「猪熊信男蔵二百十一枚の内」とあり、以後す

べての研究はこれを引くが、後述するように、この枚数と現存の「旧猪熊信男氏蔵短冊帖」(「猪熊信男氏所蔵文書」二所収)に影印の枚数とは数が合わない。

註4—三村晃功「内閣文庫蔵『文明十三年着到千首』—解題・本文初句索引」(「京都光華女子大学短期大学部研究紀要」第四二集 二〇〇四年二月)

註5—下坂守解説(特別展覧会図録「かなの美」所収 京都国立博物館 一九九二年)

註6—羽田聡解説(特別展示図録「展輪—文字に込めた想い」所収 京都国立博物館 二〇〇五年)。

註7—辰田芳雄「京都国立博物館特別展覧会『展輪天皇の書—御手が織りなす至高の美—』(二〇一二年一月三日—二月五日)を観覧して」(「岡山地方史研究」一一九 二〇一三年)、「文明一七年九月九日起日勝仁親王主催着到和歌の研究」、同「明応二年三月三日起日勝仁親王主催着到和歌の翻刻」(「岡山朝日研究紀要」第三六号 二〇一五年、同第三七号 二〇一六年)

註8—辰田氏論考において注目すべきは、着到和歌懐紙の場合、起日と満日(最終日)は、参加者の身分の順に従って記されるが、残りの九十八日間(身分の順に関係なく無秩序に記されることに特徴があること。着到和歌懐紙は、各自の自筆清書で書き付けられること。着到和歌のメンバーには、室町時代の法楽和歌や統歌に若干しか見られない女性の参加があり、女性による詠歌が、たとえば文明十七年九月九日起日の着到和歌の場合三人で三百首も得られること等であるが、「着到懐紙」に関するもので、本文では取り上げない。

註9—井上論考において、「大日本史料」に「猪熊信男蔵二百十一枚の内」とあるとして引かれた短冊群である。

註10—石澤一志口頭発表「文明十二年九月着到和歌をめぐって」(和歌文学会関西第一二一回例会 二〇一六年七月九日 於関西大学)。石澤氏は①「文明千首」(台紙付写真)、「大日本史料」第八編之二三に八枚の画像あり)②「猪熊信男氏所蔵文書」二(巻頭に影写を載せる、画像入手出来ず)とともに、当該資料③京都国立博物館蔵「後土御門天皇展輪着到短冊」を提示。②と③は実は同じ「文明千首」のつれであるが、当発表レジュメでは、歌題が一致しないので、別伝来の短冊資料であるとしている。ただし、「国文学研究資料館科研究 短冊研究会発表(二〇一六年七月三日)」における、同レジュメによる発表においては、①は②の部分であり、②と③は一具の別部分であ

る旨を口頭で言及されたと記憶する。

註11—当該着到千首の、行事また伝本の名称としては「文明十三年着到千首」、千首の短冊を言う時には「文明十三年着到千首短冊」、本稿で主に取り上げる京都国立博物館蔵の「文明十三年着到千首」の折の短冊遺品一八枚に関しては「京博蔵文明十三年着到千首短冊」の名称を使用する。

註12—たとえば「中院千首題」の「隣梅」を「隣家梅」、「蔦紅葉」を「草紅葉」とするよう変更。

註13—ごく近い時期の文明十四年八月十一日に「將軍家千首」が行われている。これは一日千首である。題の出典も「中院亭千首」題と同じで、「文明十三年着到千首」の参加者すべてを含む五十名による。テキストを確認すると、これは詠者の順もランダムで、参加者の詠歌数も異なる統歌形式である。「懐紙による和歌」に対する簡略な詠歌形式として、十五世紀中頃に全盛期を迎える「短冊統歌」と、後半期に盛んになってきた「着到懐紙」という構図で捉えることができよう。ところが、短冊が詠作形式として、あまりに全盛となっていたため、短冊の持つ簡略の属性が顧みられず、「文明十三年着到千首」のような「短冊統歌を着到で」というような発想が生まれたものか。

註14—同じく原本の一部である「旧猪熊信男氏蔵短冊帖」(「猪熊信男氏所蔵文書」二所収)は、現在所蔵が不明であることが確認されたので、手続きを取れば翻刻可能と思われるが、今回は割愛した。



図 1—1 後土御門天皇筆



図 1—2 大炊御門信量筆



図 1—3 中院通秀筆

図 1

「文明十三年着到千首短冊」京都国立博物館蔵
（後土御門天皇一一枚、大炊御門信量一九枚、中院通秀一五枚、海住山高清一九枚、甘露寺親長一五枚、四辻季経一八枚、姉小路基綱一七枚、冷泉為広八枚、計一二二枚（全体は一二九枚だが、親長四、為広三、計七枚の別の白短冊が混入）



图 1—4 海住山高清图筆

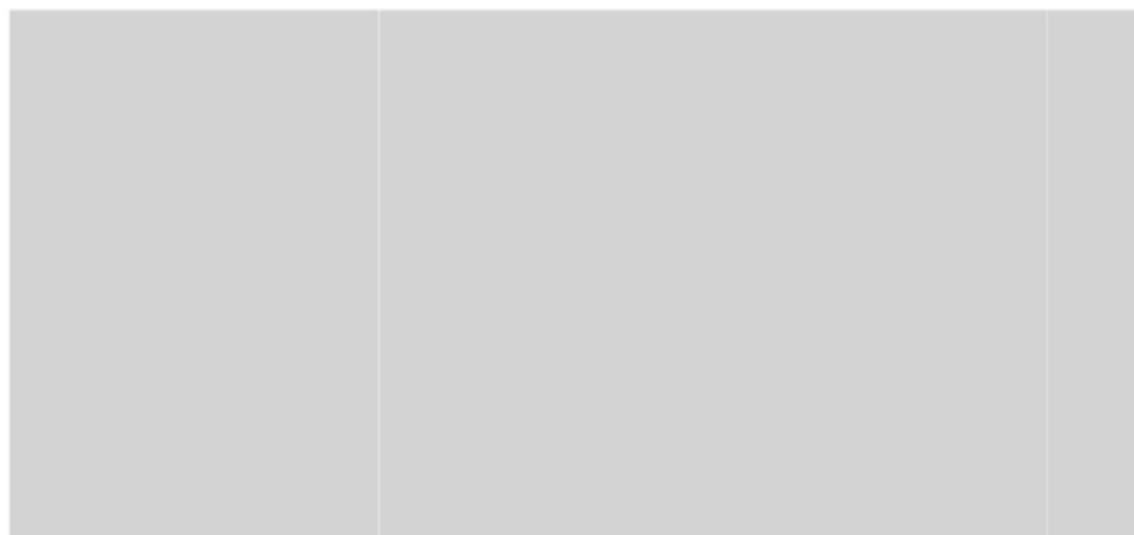


图 1—5 甘露寺親長筆

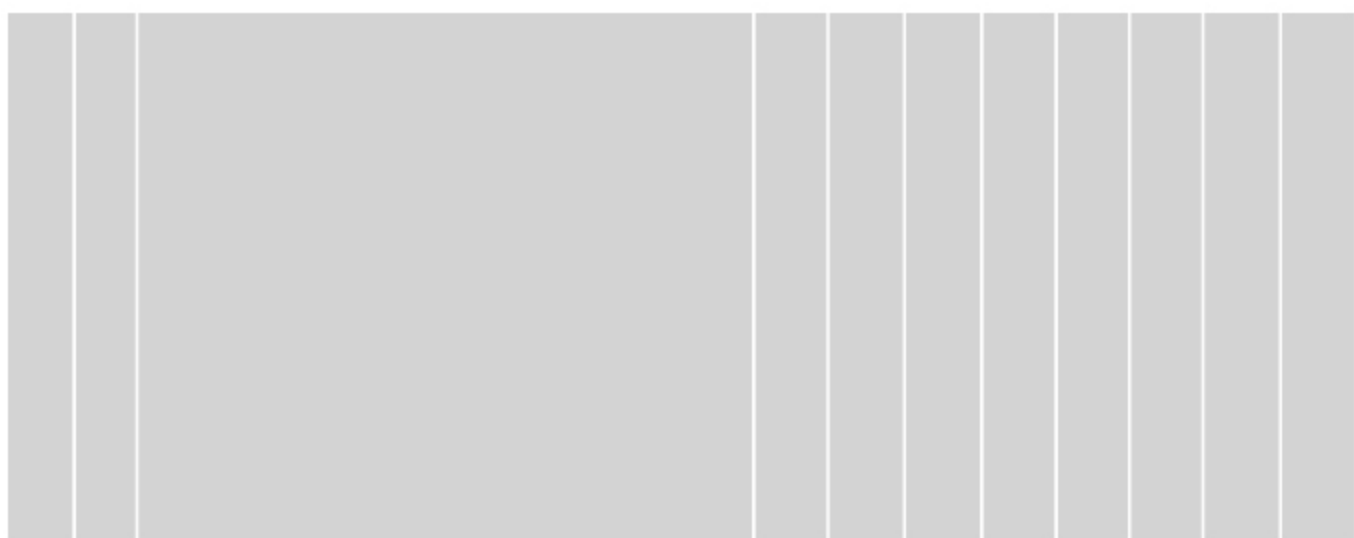


图 1—6 四辻季経筆



図 1—7 姉小路基綱筆



図 1—8 冷泉為広筆

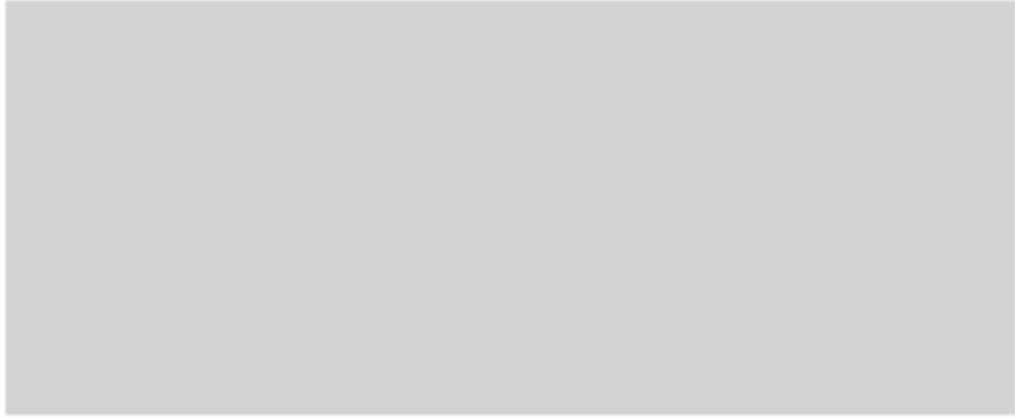


図2 「文明十二年着到摺紙」の内「九日」分 (『弘文荘待買古書目』四〇より転載)

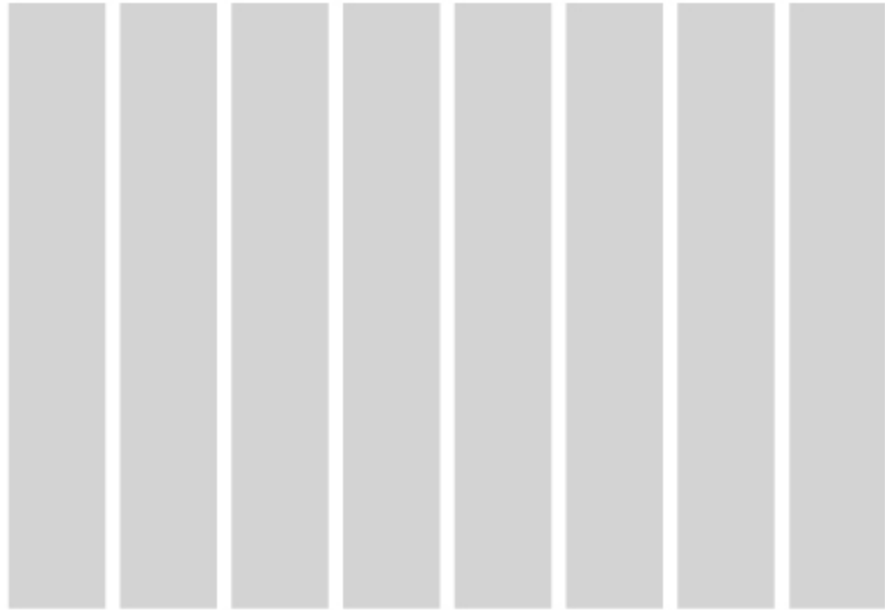


図3 「文明十三年着到千首短冊」の内「三日」分 京都国立博物館蔵



図4-2 図4-1の反転図版



図4-1 冷泉為広筆 白短冊
京都国立博物館蔵

京都国立博物館蔵「文明十三年着到千首短冊」積文

(後土御門天皇)

二日／立秋朝／あさまたきおきいつる袖のす、しきは／ねやのほかより秋や

立らむ

三日／待七夕／たのめをく一夜はかりとたなはたや／こ、ろなかくもまちわ

たるらむ

四日／夜露／草のうへにをきそふ露のふかき夜は／なにそととはん光たにな

し

五日／袖露／うき秋のなみたなそへそ夕まくれ／けさより露はむすふたもと

に〔露は〕↓〔庭は〕(内閣文庫本、千首部類本) 以下、「内閣」部

類」と略)

七日／庭苺萱／ませゆひしかひこそなけれ風ふけは／末はみたる、庭のかる

かや

八日／径虫／暮ぬとて行末いそくむまや路の／あとにはなにとす、虫のこゑ

九日／峯初雁／みねこゆるをのか羽風やはらふらし／雲にまされぬ雁のひと

つら〔はらふらし〕↓「は、□□」(内閣)、「はらふらん」(部

類)

十日／岡鹿／をのか妻なにか心をかのへの／立とへたつるさをしかの声

十一日／田嶋／かりのこすいなはかくれにたつ嶋の／羽をとさひしき秋のゆ

ふ暮

十八日／野草欲枯／色つくとみしもほとなくやたの、の／あさちしほる、今

朝のはつ霜

十九日／櫛紅葉／夕日さすと山の木々のよそめにも／たちえにしるきはし紅

葉かな

(大炊御門信量)

三日／七夕雲／けふのみとさそかさねらんほしあひの／むねあひかたき雲の

ころもは 信量

四日／野露／これもうき世のさかならし嵐おち／露さむき野をわくる夕くれ

信量

五日／枕露／かり枕あまりなるまでをく露は／おつとおほえぬ涙もやそふ

信量

六日／庭萩／鹿の音はへたて、けりな野へにさく／真萩をうつす庭のまかき

も 信量

七日／蘭薫風／にほふなり野への千くさの花もあれと／なを袖かくすふちは

かま哉 信量

八日／庵虫／秋さむみすむ身にたのむ草の庵も／かるればかる、虫の声かな

信量

九日／速初鷹／はる／とねこしやまこしくる鷹を／おもへはちかしほのか

なるねも 信量

十日／野鹿／は、そおふる生田のをのか涙もや／もつくおつらんさをしかの

声 信量

十一日／秋田風／雲まよふ日影をよはみかりほすや／をしね色こき秋のやま

かせ 信量

十二日／夕月／いてぬまの月まつこ、ろくれことに／夜をしいそかぬ山端も

なし 信量

十三日／原月／あふくそよ今すむ月も影たかき／山田のはらのすきし神代を

信量

十四日／河月／飛鳥川かはるふちせはむら雲の／なみのたえまの月にみる哉

信量

十五日／泊月／くもりなき影そさしくるしほひかた／月の出し津はみつ泊

に 信量

十六日／山家月／山ふかきよもきが袖のかり庵も／月に心のひかてはみる

信量

十七日／里擗衣／よさむもやわきてもしむ露霜の／ふるさと人の衣うつ声

信量

十八日／栽菊／露のまゝうつろふなゆめうへしうへて／千世もおもふ花の

しら菊 信量

十九日／山紅葉／山の名のあらしの末はうすくこく／をのかさまくゆくも

みちかな 信量

廿日／遠村紅葉／もみちは、色々こかれてたちまよふ／けふりみえすく遠

のひとむら 信量

廿一日／紅葉如錦／をりえたる紅葉のにしき今やし／やまの遠近とへのた

てぬき 信量

(中院通秀)

二日／立秋風／けさよりと風も秋にやこゝろをは／あはせころものしのひに

そふく 通秀

三日／七夕橋／紅葉はの色もいかにと空にのみ／おもひそわたるあまの川は

し 通秀

四日／径露／ゆくとくとおとろか道の露わけて／君につかふる身こそふりぬ

れ 通秀

五日／夜萩／ねやちかみをきふしそよく萩の音に／たれなをさりの夢もみる

へき 通秀

六日／野女郎花／おみなへしうき世のさ、の野へにしも／こゝろまとはす色

にさくらん 通秀

七日／野蘭／かきりありてうつろふ野へのふちはかま／きてみる人をうらみ

さらなん 通秀

八日／閑虫／きりくすたのむ枕もさむしろや／ねやもる月の霜になくらん

通秀

九日／初聞鷹／夕月のかけろふ雲にわたるなり／はつかりかねのこゑもほの

かに 通秀

十日／海辺鹿／これも又ねさめのつまかあはち鳥／かよふをしかの夜半にな

くこゑ 通秀

十三日／径月／月ひとりあさちかやとにところえて／それかと三の径ものこ

らす 通秀

十四日／湖月／にほのうみや月にさはらぬけふりかと／たてるもさひしから

さきの松 通秀

十五日／田月／かを□めの夢をやはみむしら露も／月ももりあかす小田のい

ほりに 通秀

十六日／庭月／つくりなす庭のいし井に影とめて／千世もすむへき秋の月か

な 通秀

十七日／遠擗衣／たかさとそふけはつる夜のたまくらに／それとしもなく

ひくきぬたは 通秀

十八日／山菊／秋をへて山ちのさくは花よりも／下葉に千世をむす露かは

通秀

(海住山高濤)

二日／立秋露／秋は先せはき袂をはしめて／ひろき野辺にも露やをくらん

高濤

三日／七夕衣／七夕のいとくりためて初秋に／秋さり衣いかてをるらん

高濤

四日／故郷露／とはれねはた、我のみそふるさとに／露うちはらふ庭のよも

さふ 高濤

五日／江萩／波をさへいとふうきねの江のほとり／うら風そよくおきの一む

ら 高濤

六日／徑女郎花／をみなへし心おほかる野辺にさきて／ゆき、の人の袖やふるらん 高清

七日／籬穂／朝露のきゆるまかきの有明に／露す、しくもさけるあさかほ 高清

八日／聞虫／袖のうへにさそふそはやきなくむしの／なみたおつとはきかぬ物ゆへ 高清

十日／田鹿／さかこえていまかへるらし明わたる／あへの田面のさをしかのこゑ 高清

十一日／山霧／たちきゆるところさためぬ夕霧に／いくたひ山の色かえるらん 高清

十二日／山月／かひかねもよそにそみゆるくもりなき／月にこえゆくさ夜の中山 高清

十三日／橘月／影きよく雲もか、らぬ秋の夜の／月にはたれかうた、ねのはし 高清

十四日／浦月／よそよりもひかりをきよみ神鳥や／いそまのうらの波のうへの月 高清

十五日／都月／わかれゆくすゑ葉なりともふちはらの／都の月やなれ／てみん 高清

十六日／井月／神代よりてらすひかりや山のへの／五十師の御井の秋の夜の月 高清

十七日／近持衣／をとちかみ夢やくたくるうちしきる／ころものうらの玉川のさと 高清

十八日／谷菊／たにふかくすむ仙人のうへしうへは／秋なき時にもほへしら菊 高清

十九日／岡紅葉／色にいて、しくれも露もみちのくや／さしもしのふのをかの紅葉は 高清

廿日／庭紅葉／朝夕にこゝろをそむる一しほは／わきて色こき庭のもみち

廿一日／暮秋露／霜に又むすひやかへんくれてゆく／秋も今はの草のしら露 高清

(甘露寺親長)

三日／七夕舟／こきかへるほとこそなけれあまの川／いかにさためしふなちなるらん 親長

四日／庵露／ことはりとおもひなせとも草のいほに／たへてはさすか露もうかりき 親長

五日／庭萩／さひしさはよその草木もこたふるを／風のとか、は庭のおき原親長(風のとか、は) ↓ 「風見□からは」(内閣)、「風□□」(部類)

六日／岡薄／よさむをはたれかほとはんはつ霜の／をかへのおはなをまねくとも 親長

七日／晚虫／なくむしよなにをたのみにのこるらん／あか月かけて霜さむき夜に 親長

八日／晚初鴈／したはれてつれなくいてし故郷や／なこりありあけに鴈のきぬらん 親長

九日／朝鹿／まつ夜たにこぬつま恋にさほしかの／あけはつるまでなとかなくらん 親長

十日／野鶉／あさち原野分の風はふきすきて／あれぬる床にうつらなくなり親長

十一日／野霧／野をかけてたちそふきりもふか草や／竹のは山の秋のあけかた 親長

十二日／嶺月／山鳥のおのへをこえてゆく雲も／月をへたてす影そみえける親長

十七日／秋夜長／あくるかとおもへとなかき秋の夜は／鳥もそらねにつけわ

たるらし 親長

十八日／水辺菊／こと／／にみかはのきくはひらけり／池には浪のあやを

なしつ、 親長

十九日／松紅葉／からにしきをりいたしたる秋の色は／たかころもてのもり

のこすゑそ 親長

廿日／簷紅葉／しのふさへ色やとへまし紅葉々を／そめにし露のあまる軒

はは 親長

廿一日／暮秋雨／ゆく秋をしたふこゝろのかきくらす／なみたか雨かよひと

さためよ 親長

(四辻季経)

三日／曉露／をさ、はらあけかたちかくをく露に／たかかへるさの袖ぬらす

らむ 季経

四日／草露／庭のくさのすゑなひく也さよふけて／葉のほるつゆのかすやそ

ふらん 季経

五日／野萩／さきみたる此としきけはさきたちて／こゝろそわくる野へのむ

ら萩 季経

六日／径薄／みちほそき山したかけのしのすゝき／人もみえぬに何まねくら

む 季経

七日／夜虫／なかきよに露をはらふとふくかせは／よはれとたえぬ野へのむ

しのね 季経

八日／夜初鴈／またなれぬみやこの雲をわけかねて／まよふかよはのかりの

一つら 季経

九日／夜鹿／ふかきよの秋のあはれをやま人も／いかにせよとて鹿のなくら

む 季経

十日／里鴉／夕されは野もせの露もふかくさの／さとのをちこちうつらなく

なり 季経

十一日／河霧／柴舟ををくるあらしやさそふらむ／秋きりくたるうちの川な

み 季経

十二日／袖月／たれもみな影くもりなきそま山の／月のかつらやこゝろひく

らし 季経

十三日／沢月／にこるらし鳴たつあとのさは水に／うつろふ月のかけのくも

れる 季経

十四日／汀月／あまおとめ袖にやとすかなみのよる／うらの汀のあきの月か

け 季経

十五日／古寺月／ともし火もか、けたえぬるふる寺の／よはのひかりやあり

あけの月 季経

十六日／閑居月／秋をへて月もとはすはいか、せむ／人はかけみぬあさちふ

のやと 季経

十七日／葛風／山さとのかきほ色つく葛かつら／くるれはさむき秋風そふく

季経

十八日／初紅葉／露やまつそめて見すらんやまかけに／おなし色なきはしの

たち枝は 季経

十九日／滝紅葉／山の名のあらしのさそふもみちかと／かけやとなせのたき

に見ゆらん 季経

廿一日／九月尽夕／はつせ山むら雲まよひゆく秋の／わかれちをくる入達の

かね 季経

(姉小路基綱)

二日／初秋雲／なかむれはあはれそこもる今よりの／秋のすかたや雲と成け

ん 基綱

三日／朝露／草も木もうへぬまさこのうへはた、／しめるをみつる庭のあさ

露 基綱

四日／浅茅露／花もなきあさちか庭のあさほらけ／色にとはれぬ露をみるか
な 基綱

五日／行路秋／わくる野の袖にうつろふま萩原／心にすれる花そ色こき

基綱

七日／野虫／かれにけり秋の末野の霜の後に／さむさあらはす松虫のこゑ

基綱

九日／山鹿／恋わふる名をやをしかのやまふかく／恨はてたる妻になくなり

基綱

十日／晚鴨／ななき夜のねさめの鴨よいく百羽／かそへもやますかきもつく

さす 基綱

十一日／浦霧／しほかまの浦の名をさへへたて、や／煙にまかふ波の夕きり

基綱

十二日／岡月／此夕みま草かりしあとみえて／露に影なきをかのへの月

基綱

十三日／沼月／影しあれは行かたもなき沼水に／やとれる月そ空になかる、

基綱

十五日／故郷月／月みよと誰にかつけむ板まあれて／床は草葉の露のふるさ

と 基綱

十六日／船月／つなきをく湊入江の舟のうちに／月待いて、うたふあまの子

基綱

十七日／径葛／色かはるくすのうらふく風さむみ／秋もいまはの道のかへる

さ 基綱

十八日／葛紅葉／こす波のしづくにぬれて山川の／いはねのつたはまつもみ

ちつ、 基綱

十九日／河紅葉／おほる河ちらぬ紅葉をうかふるも／つらきあらしの山そう

つろふ 基綱

廿日／紅葉増雨／秋にすむ月のかつらの程ならば／雨にてりそふ紅葉をは

廿一日／九月尽夜／なこりおもふ今夜の秋の袖のうへは／草木もしらぬ露そ
みし 基綱
こほる、 基綱

(冷泉為広)

三日／夕露／うき秋のこゝろの色やこれならん／夕あやしきそての白露

為広

四日／苔露／をさみえず露やそのま、岩かねの／苔のみとりとなりてみゆら

ん 為広

五日／河萩／河水にちらぬ真萩もちりしける／色かにみえてかけそうつろふ

為広

六日／岡苜蓿／かるかやのはな開にけりかの岡に／草かるをのこ心あるらし

為広

九日／谷鹿／つま恋のすかたやなれもしのふらん／み谷かくれにをしかなく

声 為広

十日／沢鴨／むれてたつ沢へのしきのはねかきに／うき数そふる我ねさめか

な 為広

十八日／柞紅葉／たらちめのは、その紅葉いろすし／露のめくみやをよは

さるらん 為広

廿一日／九月尽晩／たか中にならひそめてかゆくあき□／わかれいまはのと

りの音ならん 為広

*On Chakutō Waka—Centering on “One Thousand Sequenced Waka
Poems on Tanzaku Paper of the Year Bunmei 13”*

BEPPU, Setsuko

Tsugiuta is a form of poetry reading party where a number of poets read poems on various themes in sequence. In the later periods, *tanzaku* established itself as the paper medium on which *tsugiuta* were recorded. The author has reviewed the parallel development of *tsugiuta* and *tanzaku* from the end of the Northern and Southern dynasties to the early Muromachi period in Volume 17 of *Idemitsu Museum of Arts Journal of Art Historical Research*, and the development of the following period in Volume 19. To summarize, the word “*tsugiuta*” began to appear in the documents of the mid-Kamakura period, and the earliest forms of *tanzaku* appeared by the end of the Kamakura period. *Tsugiuta* that gradually developed throughout the Northern and Southern dynasties gained popularity to the extent of sweeping the poetry reading world of both the warrior and aristocratic classes of the early Muromachi period. During the late Muromachi period, within the system of *kōen waka* (or official poetry reading parties) put into order during the period of Emperor Gō-Kashiwabara, *tanzaku tsugiuta* (*tsugiuta* on *tanzaku*) had become one of the two styles of poetry reading, the other being the traditional *waka kaishi* (*waka* on *kaishi*).

Having the above as a basis and continuing my research further in the area, this paper will introduce and study the *chakutō waka tanzaku* that was popular during the reign of Gō-Tsuchimikado which could be placed in between the early and late Muromachi period. It was exhibited in the special exhibition “The Form of *Kana*—National Treasure ‘Minuyo no Tomo’ and Masterpieces of *Kobitsu*” carried out from November 19 to December 18, 2016, but since the display was only fragmentary, this volume will show the entire work.

<p>出光美術館研究紀要 第二十二号</p>	<p>二〇一七年一月三十一日</p>	<p>編集 出光美術館 <small>公益財団法人</small> 発行 東京都千代田区丸の内三—一— <small>東京都千代田区丸の内三—一—</small> 電話 〇三—三三—三三—九四〇二</p>	<p>制作 株式会社 ブリュック</p>	<p>印刷 東洋美術印刷株式会社</p>
------------------------	--------------------	--	----------------------	----------------------